



第11号

編集発行

園田学園女子大学

シニア専修コース

「けやき便り」編集クラブ



生涯学習開設 35 周年に際し挨拶をされる富永学長

## 「生涯学習開設 35 周年によせて」

総合生涯学習センター所長 木村 保司

本学が公開講座を始めて 35 年になりました。お陰様で 12 月 6 日には記念講演会を開催し、田辺真人先生や角淳一氏をお迎えし楽しい一時を過ごす事ができました。講演の前には、富永学長よりご挨拶と優秀川柳の表彰式がありました。全国から 577 句の応募がありました。

この記念講演を無事に終えることができたのは、まさにシニア学生の皆様のご協力に依るものです。開催のお手伝いをお願いすれば直ぐに駆けつけていただき、写真を！ とお願いすれば、ハイよっと来ていただきました。まさにシニアの皆様のパワーは見事そのもので驚嘆の至りでした。改めて御礼申し上げます。

総合生涯学習センターは、様々な先輩に支えられながらここまで歩いて来ました。まだ 35 才です。シニアの皆様からすればまだまだ若造の鼻たれ小僧ですが、一同これからも進化して参ります。どうか更なるご支援をお願い申し上げます！

目次

表紙 「生涯学習開設 35 周年によせて」	.....	木村センター所長	P1
生涯学習開設 35 周年記念講演会	.....	けやき便り編集クラブ	P3
生涯学習開設 35 周年を迎えて	.....	本学名誉教授 田辺 真人	P4
		元生涯学習センター課長 中野 友擴	P5
		元生涯学習センター所長 松成 雄三	P6
30 周年から 35 周年へ、そして 40 周年へ向けて	.....	研究生 中村米三郎	P7
けやき祭体験記	.....	研究生 中村米三郎	P8
シニア専修の研究生が初めての講師に挑戦	.....	けやき便り編集クラブ	P10
国際文化学科 1 年生歓迎会	.....	国際 2 年 樽井 敏彦	P11
情報学科交友会新入生歓迎会	.....	情報 2 年 徳田 將之	P12
国際文化学科 学外研修バスツアー	.....	研究生 中村米三郎	P13
平成 26 年度文学歴史学科 3 年「少し早目の忘年会」	.....	文歴 3 年 徳永 悦子	P14
平成 26 年度文学歴史学科 2 年生の忘年会	.....	文歴 2 年 青木 利明	P15
「国際総合研究」発表会&忘年会	.....	国際 3 年 安部 隆	P16
第 4 回情報学科交友会懇親会	.....	情報 2 年 甲斐 貞子	P17
フィールドワーク？ 沖縄道中記	.....	国際 3 年 金森扶美子	P18
けやき遊歩クラブに初めて参加して	.....	文歴 1 年 合田 一弘	P20
私の“チンドン”ものがたり	.....	文歴 1 年 伊藤 幸子	P21
伝統文化の“香道”を楽しむ	.....	文歴 1 年 山田 弘子	P22
木工に魅せられて 20 年	.....	国際 2 年 楊 錦華	P23
ネパールの旅 ～世界の屋根、ヒマラヤへのトレッキング～	.....	国際 3 年 道端まちこ	P25
大菩薩峠・大菩薩嶺と紅葉の昇仙峡	.....	文歴 3 年 橋本 秀明	P28
東南アジア 4 ヶ国を旅する①	.....	研究生 十河 和夫	P29
過ぎた時間を味方にして ―旧かなを学ぶ―	.....	文歴 2 年 相田 晴夫	P31
JR の色	.....	研究生 水原 剛	P31
読者の広場	.....	けやき便り編集クラブ	P32
投稿依頼・編集後記・HP の検索方法	.....	けやき便り編集クラブ	P34

## 園田学園女子大学 生涯学習開設 35 周年記念講演会

2014年12月6日(土)の13時から園田学園女子大学総合生涯学習センター主催による生涯学習開設35周年記念講演会が1号館4階の講堂にて開催されました。

講演会は総合生涯学習センターの木村所長の司会で、始めに富永学長から「大学の持っている知的資産を社会に還元し、貢献することは大学の果たすべき大きな使命であり、本学では昭和54年に公開講座を開講、平成14年には3年制のシニア専修コースを開設した。これからも総合生涯学習センターの発展と充実に務め、地域の皆さんの教育の場、交流の場としての役割を果たしていきたい」との挨拶がありました。



引き続き開設35周年を記念して募集された川柳の優秀者の表彰が行われ、学長賞と優秀賞並びに入賞作品の紹介と賞品が授与されました。

本学の川上教授からは「総数577句の応募があり、量的にも質的にもレベルの高い作品ばかり」とのお話と入選作品についての講評がありました。



その後、記念講演に移り本学名誉教授で元生涯学習センター所長の田辺真人氏が「生活や街かどの歴史を学んで大きな感動を!」、休憩を挟んで元毎日放送アナウンサーの角淳一氏から「笑って楽しく生きて行く!」をテーマに講演が行なわれました。



当日の講演会場にはシニアの方を中心に大勢の人が詰めかけ、1号館3階では生涯学習についてのこれまでの歩みや応募されたすべての川柳が展示されており、皆さんが熱心に見入っておられました。

### <川柳入選作品>

#### 学長賞

講義聴きうなずける人うらやまし

尼崎市 松田 神子

#### 優秀賞

芭蕉一茶みんな年下俺シニア

宝塚市 熊本 健也

#### 入賞

老いの夢昔、田園今、園田

入間市 星野 のぶこ

不仲でも転ばぬ為に手をつなぐ

大阪市 中野 博正

楽しみは生涯学習夫婦連れ

伊丹市 鳥越 世史子

(取材と写真：けやき編集クラブ 樽井、中村)

## 園田学園女子大学 生涯学習開設 35周年を迎えて

本学の生涯学習への取り組みは、昭和54(1979)年に「土曜公開講座」が開設されてから始まり、平成14(2002)年からは3年制のシニア専修コースが創設され現在に至っています。この度、生涯学習開設35周年を迎えて過去に生涯学習と関係の深い3名の方々から寄稿文をいただきました。

### 生涯学習のパイオニア園田女子大で

本学名誉教授 田辺 真人



園田学園女子大学が生涯学習のパイオニアになった背景には、一谷定之丞先生のご尽力がありました。氏は兵庫県教育長や副知事の在任中に、全国的に高い評価を受けた嬉野台生涯教育センターやいなみの学園を創設さ

れ、県庁退職後、昭和50年に本学理事長に就かれると、やがて園田女子大の特色として生涯学習と国際交流を考えられたようです。多くの人達がニュージーランドとニューギニアを混同するような40年近くの前の時代に、オセアニアとの交流を進められる一方、地域社会に開かれた生涯学習を今後の大学の使命だと考えられたのでしょう。

昭和53年には学内に吉原栄徳教授を初代委員長とする生涯教育(当時)委員会が設置され、同57年には国際教育と生涯学習を所管する「教育センター」を開設して長年神戸新聞文化センターで文化事業や講座運営を担当された中野友擴氏を事務方に迎えられました。園田の生涯学習が本格的にスタートし、「人間を考える」という通年の公開講座などは大学在学学生も選択でき、出席条件とレポート提出によって授業なみの単位を認定するという昭和57年段階では画期的な教育が始まりました。

当時、私はニュージーランドのマッセイ大学に勤務していましたが、日本に帰ることになり、

今の一谷宣宏理事長とのご縁もあつて平成3年に本学に着任しました。国際交流担当のはずだった私の仕事が学内の人間関係のために頓挫していた時に、二代目の生涯学習委員長・笹田利光教授と中野課長から生涯学習の仕事に関わってくれないかというご依頼がありました。こうして、翌4年から短大や大学の授業の一方で、私の公開講座での講義、多分野にわたる講座の企画、学外に出る見学会など興味深い仕事が始まりました。

その間、学外でもメディアでの放送、講演会や高齢者カレッジでの講義など充実した毎日を送っていましたが、その十年ほどの間に、社会も大学も大きく変わりました。

笹田先生を継いで私が三代目の生涯学習委員長になったころ、本学では教育センターの業務を二分して国際交流センターと生涯学習センターを置くことになり、平成13年に私は新設の生涯学習センター所長を拝命しました。ちょうどその頃、学外の神戸市シルバーカレッジや兵庫県の阪神シニアカレッジの受講生の方々から興味深い要請がありました。両カレッジ卒業後に学ぶ場を作ってほしいというものでした。このような社会の要請に対して私は、公設の数年制の高齢者カレッジ卒業後の学習の場を提供しようと園田学園女子大学シニア専修コースを考え出したわけです。おりから生涯学習センターに異動になった松成雄三部長の抜群の事務管理能力に支えられて。同専修コースは社会的に高い評価を得るものになりました。35周年に当たって、園田での経験を振り返らせていただきましたが、今後とも園田の生涯学習の発展を祈り、皆様方の一層のご支援をお願い致します。

## 「創世期と各講座の思い出」

～前半二十年を振り返って～

元生涯学習センター課長 中野 友擴



昭和五十七年四月一日、本学に生涯学習専門のセクションが生まれた。

主旨は、先代一谷定之丞理事長の人間学を具体化し、地域住民への還元と友好を率先して行っており、早朝のキャン

パス開放や施設の利用などを含めて、大学は地域と共にあるという考えを実践するためのものであった。

私は、神戸新聞カルチャーセンターで文化事業に携わって二十年の節目であり、尊敬する一谷理事長の招聘に一も二もなく快諾をして同センターに着任した。

この年から特別総合講座「人間を考える」がスタートした。社会人と学生が同じ席に着いて学ぶという画期的なもので、両者が半数ずつ、学生には正規の一般教育科目として二単位が与えられ、社会人には修了証書が授与される。二年目は「愛の諸相」について。人間の持つ愛の尊厳をテーマに家族愛、社会愛、友情、恋愛等を学内外の講師が語った。

細かく書く字数がない。スタートを分かっていたところ、三つに分けて私の約二十年の思い出を綴っておこう。それは、同センターのメインの仕事でもあったからである。まず「人間を考える」講座では、年間五、六人の著名な学外講師を呼んだ。例えば、朝比奈隆、望月美佐、小野喬・清子、清水公照、林家辰三郎、時実新子、堀江謙一、北原亞以子まだまだ。その中のエピソードを一つ話すと、書家望月美佐さんに動の書を畳一枚ほどの和紙に見事に書いてもらったのだが、運ぶ途中で破れてしまい、

自宅まで行って無償でもう一枚書いて貰った（三十周年記念館の二階階段を上った正面に飾ってある）。堀江謙一さんは旧知の間柄、ペサウ号を見てもらって喜んで下さった。講演嫌いのわが師、時実新子の川柳談義を聴けたのも感慨深い。

学生と社会人が親交を深め、卒業後、結婚式に招かれた人もいた。嬉しい話だ。

二つ目は「けやきコンサート」だ。幼児教育の辻本健市助教授（当時）と県下の音楽堂やホールではなくユニークな会場を選んでコンサートをした。一番の思い出は、なんと言っても「出石酒蔵コンサート」だろう。酒蔵の屋根裏のような二階にピアノを上げ、底が抜けないようにつかい棒をしての音楽会。百五十人が歌と演奏に酔った。囲炉裏を囲んで、温室の花の中で、満天の星の下で、グレース・ケリーのヨットが浮かぶ海辺のホテルでと、それはそれはユニークなもので、各地に園田学園女子大学の名をアピール出来たと思う。

三つ目は移動講座だろう。年明け早々に講座（または講演）内容と講師名を明記した一覧表を作って県下の公民館等に百通発送して、地元からの注文を待った。地域での講座計画は多々あるが企画に乏しく、たくさんの地域から講師の派遣依頼が届いた。これはまさに広報活動である。今でも、赤穂市、相生市、朝来市和田山町、和歌山県田辺市等に先生方は講演に行き、大学のPRにこれ務めておられることだろう。

また、歴史や園芸の学外研修で学園バスを利用して一泊二日の研修旅行をし、いい思い出が作れた。国際交流と共に、生涯学習は大学の授業の隣に立てられた二本の柱ではないかと、二十年を振り返って自負している次第である。

（文中一部敬称略）

## 『けやき便り』に寄せて/近況報告と 『シニア専修コース』発足の頃

元生涯学習センター所長 松成 雄三

★定年退職後住み慣れた神戸を離れ、秋田県能代市に移住。地元の人から「どうしてこんな寒い田舎に来たの？」と言われて丸2年になりました。北前船と秋田杉で栄えたこの町は、昭和40年代を境に外材に押され逼塞。人口は減り続け、店はシャッターを閉め、若い人は進学・就職に多くが県外に出て行きます。残念ながらこの町に大学はありません。

退職したら・・・と計画していたカフェレストランを昨年開業。お昼のランチ客が殆どで「まあ、ぼちぼち」ですが、働くことが



自作ベンチで

生活のリズム。お客さんとのやり取りがボケ防止とありがたく思っています。

★『シニア専修コース』は平成14年に『文学歴史学科』を開設するところから始まりました。公開講座が半期のところを「3年制のコースって受講者が集まるか知らん？」と心配しましたが、当時所長の田辺真人先生の勇断と馬力でスタートすることができました。このときの入学生生の平均年齢がなんと72歳であったことは、ホントに驚きでした。更に驚いたことには、入学直後に「自分たちの卒業後の学びをどのように用意してくれるのか？」と3年先のことに注文をつけてきたのです。田辺所長と2人で「こんな元気な年寄り、知らんわー！」と言いながら「まあ、悪いようにはしません」といい加減な返事をしたのですが、翌年の4月にも同じこと

を言われ、3年目にもまた・・・それが、今の『研究生』制度となりました。

平成15年開設の『国際交流学科』では開講直後から一部講師への不満と「大学は自分たちに何を学ばせようとしているのか？」と厳しい「団体交渉」を重ねることとなり、講師交代、カリキュラム再編成を経て翌々年には学科名を『国際文化学科』と変更することになりました。

3年制とした根拠は、1年目基礎編、2年目各論、3年目の最終年度には、個人或いはグループで卒論的研究としたのですが、これに対して「この歳になって論文は堪忍して欲しい。自分たちは先生方の崇高（敵もさるもの。冷やかし気味に）な講義が聴ければ満足」と頑張り続け、我々はとうとう諦めさせられました。しかし私が退職する頃には、一部ですが個人或いはグループで学びのまとめに取り組みむ例がでてきました。

こんな具合で受講者は意気軒昂、「前向き・熱心」な部分があるとは言え、わがまま、言いたい放題。所長以下スタッフは大変でした。

★『シニア専修コース』は他大学等からも注目されました。在籍時に入会した『全国大学公開講座研究会』では発表を、大阪教育大学の生涯学習を専門とする先生や文科省からヒアリングを受けました。本学のような小規模大学が日本で唯一「3年制」というだけでなく、講座数・質において優れた「学びの場」を提供しているからでした。★文学歴史、国際文化の学科が大学学部から消滅して年数も経過した今日、いかなる学びを社会に提供するかは、園田学園女子大学が生涯学習を大学の使命としてどのように捉え、対応するかであります。かつてかかわった者としてこの点には大きな関心があり見守っていきたいと思っています。

★在勤時に図書館の存在をありがたく感じました。大学のない地方に住む今、なんと大学はありがたいところだったのか！と改めて痛感しています。みなさんは恵まれています。

生涯学習開設 30 周年から 35 周年へ、そして 40 周年へ向けて

研究生 中村 米三郎

私は、平成 22 年 4 月国際文化学科に入学しました。その時のクラスメートは 15 名で、皆それぞれの希望を持って入学式に参加しました。

その年は、はからずも、生涯学習 30 周年行事を行った年でした。平成 22 年 12 月 11 日に「生涯学習 30 周年」のお祝いがありました。

**祝！！ 生涯学習 30 周年**  
**「今日は一日生涯学習三昧」**



生涯学習 30 周年に際し挨拶をされる今井学長

生涯学習 30 周年記念フェスタ『今日は一日生涯学習三昧』開催される  
……平成 22 年 12 月 11 日……

生涯学習 30 年、そして明日へ  
「けやき便り」 2 号より

30 周年ということもあってか、第 1 会場「メイン会場」、第 2 会場「ミニ体験講座」、第 3 会場「クリスマスケーキをつくろう」、第 4 会場「うどん打ち体験講座」、「受講生作品発表会場」と多彩な催し物がありました。

そして夕方には、開花亭で、先生方・受講生・留学生等関係者が集まって「30 周年記念懇親会 & そのだ国際交流の夕べ」が開催されました。



「30 周年記念懇親会 & そのだ国際交流の夕べ」

なお、30 周年記念行事の詳細は「けやき便り」2 号をご覧ください。

平成 26 年 12 月 6 日に「生涯学習 35 周年」のお祝いが 1 号館 4 階講堂でありました。

富永学長の挨拶、35 周年を期に川柳を募集され、その入選作 5 首（応募数 577 首）の発表、そして、田辺真人本学名誉教授と角淳一氏の記念講演がありました。



司会の木村保司総合生涯学習センター所長



入選した川柳の講評をされる川上恭子本学教授

**\*平成 22 年 (30 周年行事实施)**

シニア専修コース 在籍者数 283 名  
開講講座数 31 科目 (内研究生科目 5 科目)  
クラブ数 3 クラブ  
公開講座(延べ受講者数) 1772 名

**\*平成 26 年 (35 周年)**

シニア専修コース 在籍者数 328 名 (H25 年)  
開講講座数 44 科目 (内研究生科目 7 科目)  
クラブ数 7 クラブ  
公開講座(延べ受講者数) 2152 名 (H24 年)

「年々歳々花相似、歳々年々専修コース不同」  
5 年後に、すばらしい「生涯学習 40 周年」が迎えられることを祈念しながら稿を終えます。



研究生 中村 米三郎

10月18日、19日は「けやき祭」の日である。両日とも見事な秋晴れで、園田学園のキャンパスは、若い人たちの躍動で終日活気に溢れていた。私は、青春一杯の二日間を体験した。楽しかった。

第1日目 (18日)

夕方6時からの「光の切り絵」を楽しみに3時ごろ大学に着いた。

「若者の祭典」にも夕闇が迫ってきた。これから、「光の切り絵」4点の開催である。



野外に学生さん、教職員さん、地域の団体さんの出店が41店もある。



グラウンドでは、カラオケ大会が行われていた。



①「秋を感じるけやきアベニュー」 正門で



②「光の動物園」 7号館の横で



③「ぱれっと」 グラウンドで



④「みんなでつながる」 1号館の前で

第2日目 (19日)

今日のお目当ては、学生さんの中で頑張るシニア専修コースの「けやきコーラス部」と「けやき写真倶楽部」の活躍ぶりであった。

「けやきコーラス部」は、13時に開花亭（学生食堂）ホールで開演。



客席には、シニア専修コース生に混じって学生さんや、着物姿の方もおられて良かったですよ。素晴らしいコーラスを有難う。

「けやき写真倶楽部」は、3号館1階フロアを独り占めで頑張っていました。写真展なので、まずはモデルさんとともに作品をパチリ！



「けやき写真倶楽部」の木村部長、本職？のカメラマンになって学生さんを熱写。助手のYさんも頑張ってください。



## 園田学園女子大学公開講座

## シニア専修の研究生が初めての講師に挑戦

2014年12月13日(土)、10:40から「人間を考える」の公開講座で本学シニア専修コースの研究生である木下俊造さんと中村米三郎さんが講師を務められました。

講義に先立ち総合生涯学習センターの木村所長から「この『人間を考える』講座のシリーズは、およそ33~34年続いているが、その中で初めてシニア専修コースの研究生が講師として参加する特別な記念の日です。とは言え講師のお二人はともに人生の達人で、『経験から年齢を考える』という本日のテーマに相応しいお話が聴けると思います」との紹介がありました。



その後、研究生の木下さんの講義に移り、現在の生活をラグビースクールの指導員、詩吟、本学でのシニア専修生と大きく3つに分け、それぞれの分野でのチョットいい言葉やいい話を中心とした考え方や教訓など、後半では四苦八



苦の四苦「生老病死(しょうろうびょうし)」の死を趣味に置き換え、それぞれに関して自分の経験を中心にテンポ良く、時には笑いを誘う巧みなトークで披露されました。また、最後には

まとめを黒田節と得意の詩吟で締められたのが印象的でした。



続いて研究生の中村さんからは「アンティ・エイジングを考える」というテーマでこれまでのシニアライフを定年後第1期のボランティア活動を中心とした期間と定年後第2期の本学シニア専修生としての期間に分け、活動の内容や当時の心境などを紹介され、定年後の「自由に活動できる時間」をいかに有意義に過ごすかが重要であり、独自の計算方法に従って算出された目標年齢を定め、目標年齢が戸籍年齢に近づかないことが「アンティ・エイジング」と考えるとのお話をされました。また、本学を卒業後は好きなパソコンのソフト作りや健康マージャンと史跡巡りを一緒にしたサークルを作り、活動することを目標にあげられました。



当日の公開講座にはシニア専修コースの特別受講生を含めて38名の方が受講され、お二人の経験に基づいた今後のシニアライフの参考になる素晴らしい講義に堪能された様子でした。

(取材と写真：けやき便り編集クラブ 樽井、平田)

## 平成26年度 国際文化学科1年生歓迎会

国際文化学科2年 樽井 敏彦



5月16日（金）の午後3時から、国際文化学科1年生の方を迎える歓迎会がチャティで開催されました。今年の歓迎会は国際文化学科の新1年生8名、2年生14名、3年生6名、研究生7名に河合名誉教授と総合生涯学習センター榊井課長を加えた37名の参加者により行われました。



5月の初めに退院されたばかりの河合名誉教授が「これからは国際総合研究を本格化させていきます。皆さんも1年間の授業をしっかり受講して下さい」と元気に挨拶され、引き続き研究生の中村さんの音頭による乾杯の後、テーブルに並べられたご馳走を食べながらの歓談が始まりました。途中から出席された榊井課長からは「3年間頑張って学園に残っていただき、その後も研究生として末長くお付き合い下さい」との挨拶がありました。

その後、2年生の落田さんによる3つの手品が披露され、皆さんの拍手喝采を受けました。

次に1年生からの自己紹介に移りました。会社を終えられてすぐの方や他のカレッジを経験して入学された方などいろいろでしたが、これから勉学は勿論のこと、クラブ活動にも積極的に取り組みたいとの皆さんの意欲と決意が伝わってきました。これを契機に同じ国際文化学科で学ぶ仲間として親交を深めて仲良く、楽しくやっていきたいとの思いを強くしました。



最後に6月28日（土）のバスツアーへの参加呼びかけと河合名誉教授を囲んでの記念撮影を終えてお開きとなりました。



幹事の皆さん、ご苦労さまでした。

## 平成26年度情報学科交友会新入生歓迎会（懇親会）

情報学科2年 徳田 将之

情報学科第6期生を迎え今年で2回目となる新入生歓迎会（懇親会）が5月12日（月）に山本恒名誉教授と総合生涯学習センターの榊井かず美課長に来賓としてご来臨いただきチャティにて16時より開催された。



幹事の曜日選定や開始時間に不都合もあったのか新入生18名のうち出席者は12名と少し寂しかったが、在學生16名に今年度卒業生（研究生）3名と来賓2名を加え計33名の宴会となり、野間さん（3年生）の司会から始まり山本名誉教授と榊井課長よりご挨拶をいただき、渡邊さん（2年生）の乾杯音頭の後、ビュッフェスタイルの飲食で歓談しながらの自己紹介となった。

その紹介のなかで新入生から「会社を定年退職し、やっと仕事のストレスから解放されたと思っていたら情報学科では難儀な提出課題もあり、

またストレスを抱える羽目になってしまった・・・」と、爆笑を誘うお話やら、酒量のメートルが上がり過ぎたせいなのか、「（〇〇講義で使用している）△△テキストは良くない！」とかクレームをつける豪傑？もおられ（その後、納得され良いテキストである、と発言撤回された由ですが）これにも一同大笑いで大いに盛り上がった宴会が続いた。そのあと新入生の交友会役員を選出するアンケートを回収し4名を世話役としてお願いすることにし、また互選により2名のクラス委員を決めてもらった。



最後に全員の記念撮影となり、渡邊さん愛用のニコン一眼レフをセルフタイマーモードで3回も撮影したにも関わらず出来上がった写真は全てKさんとご本人の顔が半分欠けていたのは愛嬌である。



ともあれ、2時間余りの歓談の後、半年後くらいを目途に再開を約し宴はお開きとなった。

尚、一年生交友会新役員の呼びかけによりこの歓迎会の後、新入生で今回欠席された方も含め全員？で昼食会を開き懇親を深めた由で、そのままとまりの宜しきことは頼もしい限りである。

## 国際文化科学外研修バスツアー

## 徳島県立鳥居龍造記念博物館を見学する

研究生 中村 米三郎

国際文化学科では、毎年研修バスツアーを行っている。基本的には、野外民族博物館リトルワールド（犬山市）、太陽公園（姫路市）を毎年交替に見学していたが、今年は初めて鳥居龍造記念博物館（徳島市）に行った。

6月28日（土）9時、阪急武庫之荘駅前のコンビニに集合。天気は残念ながら「雨模様」の予報であった。

参加者は、引率者河合名誉教授、1年2名、2年13名、3年10名、研究生2名の計28名であり、幹事は2年のクラス委員である。

12時前に、バスは鳥居龍造記念博物館に着き、館内に入る。印象に残る館内であった。



河合先生と記念博物館の館長と共に記念撮影を行う。



記念博物館の前で記念撮影を行う。



記念博物館は、徳島県が生んだ人類学・考古学・民族学の先駆者である鳥居龍蔵博士の業績を東アジア各地や国内で収集した資料や写真などを通して紹介しており、素晴らしかった。

13時20分記念博物館を出発して、14時30分に淡路ワールドパークに到着。

ワールドパークでは、参加者が思い思い童心に返って園内を楽しみ、先生も一緒に楽しまれたようであった。



一日頑張ってくれた学園バスの前でパチリ。



16時、淡路ワールドパークを出発。幹事が心配していた雨にも遭わず、18時に武庫之荘駅に帰着。今日は、河合先生、1年、2年、3年、研究生がともに学び、遊んだ有意義な一日であった。幹事の皆さん、ありがとう。

平成26年度文学歴史学科3年

「少し早目の忘年会」

文学歴史学科3年 徳永 悦子

今年2回目の懇親会を忘年会として12月3日「かごの屋」さんで催しました。参加人数19名です。



文学歴史学科3年は2年の後期に委員を選出し、懇親会を初めて昨年12月に催しました。委員として1年、やっとお名前とお顔が一致出来ました。



今回もいつもの顔ぶれが集まり食べて飲んでおしゃべりして、あっという間の3時間でした。



卒業の思い出として3月にハイキングか日帰り旅行・卒業式後の茶話会を検討して全員一致で催す事になりました。

ただ思い出日帰り旅行は二転、三転と大変でしたが、クラスの有志の方々が企画・下見を引き受けて下さって本当に感謝です。

和気あいあいの楽しい忘年会でした。



最後に、あと少しで卒業ですが委員の橋本さんと助け合い、楽しい学生生活を送りたいと思います。



## 平成26年度文学歴史学科2年生の忘年会

文学歴史学科2年 青木 利明

11月17日に平成26年度文学歴史学科2年生の早めの忘年会を開催しました。開催場所はいつもの「かごの屋」さん。今回も24名中20名の高出席率でした。

2年生になって必修科目がなくなり選択必修科目のみとなったため、2年生全員が顔を会わせる機会がなくなり、久しぶりに顔を会わせる人もありました。



話題も近況報告から始まり、お互いの受講科目の内容や講師の評価、また政治の話まで広がり、会話が大いに盛り上がりました。

予定の2時間30分が、あっという間に過ぎてしまいました。最後に集合写真を撮り、「3年生」としての再会を約しての解散となりました。

## 「国際総合研究」発表会&忘年会

国際文化学科3年 安部 隆

12月12日（金）の午後、国際文化学科コース3年の必修科目である「国際総合研究」のフィールドワーク研究についての発表会と国際文化学科3学年、研究生合同による忘年会が実施されました。

当日、14:40からの発表会では、本講座を担当する河合名誉教授の挨拶に引き続き、3つのテーマについて発表がありました。まず「台湾人は本当に親日か」というテーマでは、2度の台湾でのフィールドワークと、台湾からの留学生との交流、国立民族博物館の展示見学により、台湾人の意識調査を実施し、東日本大震災の義援金や、訪日観光客等、多角的に結論を導き出しておられました。また、台湾の食文化にも触れられており大変興味深い発表をされました。



続いて「沖縄からみた東アジアの宗教と文化」では、河合名誉教授と5名の女性が参加して沖縄の文化を体験されました。「癒しの楽園、めんそーれ沖縄」「沖縄とアジアの繋がり」「ニライカナイ・御嶽・シーサー」について沖縄文化を守る人々の気持ちが伝わる発表でした。

最後は6年にも及ぶブータンの幸福論を研究し続けている中で「ブータンの暮らしから見た日本の生活文化のルーツについて」をテーマにした発表がありました。照葉樹林がもたらしたものが日本の生活文化のルーツであり、仏教および山と森への信仰心がもたらしたものが東西の農耕文化を発展させた結論づけられていました。

発表会に続いて16:20からチャティに於いて3学年、研究生合同による忘年会が行われ、河合名誉教授をはじめ在学生30名と研究生4名の総勢35名が参加しました。



ビールで乾杯後、日頃、なかなか話をする機会がない学生や研究生が一堂に集まったということで各テーブルでの会話が弾みました。宴会では恒例となったO氏の手品やT氏の詩吟などの楽しい余興も飛び出し、終了予定の18:00までの時間があっという間に過ぎ去りました。



最後は河合名誉教授を囲んで研究生、各学年単位に記念写真を撮影してお開きとなりました。国際文化学科の年間行事を担当する各学年クラス委員に、来年度も頑張っていたきたいと思いました。

## 第4回 情報学科交友会 懇親会

情報学科2年 甲斐 貞子

木枯らしも一休み、晴天の12月10日、チャティに於いて第4回情報学科懇親会が開催されました。今回は先生方以外、1年生～研究生までクジ引き抽選の相席！お互い、普段はなかなか言葉を交わす機会も少なく、さてその効果の程は・・・今後のお楽しみ。

間もなく2年生の司令塔、徳田さんの軽妙な司会でサーブ。先生方も見事なレシーブ、アタックで応えて下さり快調な滑り出し。お待ちかね、乾杯の音頭は発起人のお一人、3年生の野間さん。その後、向学心・好奇心溢れる生徒達が、それぞれの学習経過や今後への期待などを述べる中、在籍期間の延長をとの研究生の声や、会の継続への発起人諸先輩の思いと共に、学びの場に対するパッションがチャティのホールを満たします。

暫し、歓談とフード&ドリンク。  
各テーブルは大いに盛り上がり♪♪



瞬く間に時は過ぎ・・・。

記念撮影も無事終了し、和やかムード一杯、1年生の中林さんの豪快な一本締めで閉会となりました。

山本先生始めご出席頂いた先生方、準備・片づけに労して下さった皆さん、日程上、長時間待って下さった皆さん、授業後駆け付けて下さった皆さん、楽しいひと時を有難うございました。残念ながら今回は欠席された皆さん、次回は是非ご参加下さい。



上手く  
撮ってね～



## フィールドワーク？ 沖縄道中記

国際文化学科3年 金森 扶美子

河合名誉教授がオセアニア文化資料の多く収蔵されている沖縄の海洋文化館に行かれると聞いて、河合先生が担当されている「国際総合研究」を受講中の女性5人は、各々の課題を持ってフィールドワークのため沖縄を訪れました。

10月15日(水) 快晴 26℃ 22℃

前日までの台風19号に心配したけれど、快晴の伊丹空港から沖縄へ。那覇空港からすぐに海岸線沿いにバスで琉球村へ。思っていたよりなかなか琉球王府時代らしさを表した造りになっていて、エイサーや道ジュネの踊り、太鼓、獅子舞などの琉球芸能を楽しませてもらった。サーターアンダギー、サトウキビジュースを味わう。売店のおばさんと会話を楽しむ。

あと名護市に入り、先に河合先生の提案で名護観光協会に依頼していたボランティアガイドさんと合流し、夕食は居酒屋さんに案内してもらい、素敵なお話で満喫しているところへ、常連の琉球三線のプロ、古我知さんがいらしてビール一杯でライブをしてもらいさらに盛り上がる。

その後民宿に泊まりたいとネットで探す条件的に難しくようやく予約できた宿へ真っ暗な道を走り到着。入ってびっくり。素泊まり2,000円。一人部屋、二人部屋、三人部屋、二段ベッド、風呂なし、シャワーのみ、洗面も流しで、トイレも外へ出て。部屋に至ってはドアなしカーテンのみ。



10月16日(木) 快晴 27℃ 22℃

早朝起きて民宿眺めてまた驚く。これは倉庫とかバラックとか、そしてサイケデリックなポップアートなカラフルな塀に「サボテ

ンスマイル」の文字が。先生が意外に平気な様子なのでヤレヤレ。先生はフィジーで慣れておいでか？ これもまたいい経験かも。周辺には沖縄独特の大きなお墓、パパイヤやシークワサーの実がなっている。

さて朝食なしでタクシーにて海洋博公園へ。青い空、エメラルドグリーン的大海、さざ波寄せる海岸沿いにある公園の素晴らしさ。気持ちが大きくなる。まずは「美ら海水族館」、次は河合先生の沖縄での最大の目的「海洋文化館」へ。水族館と違って人気がないそうだが、設備も素晴らしく見ごたえのある場所でした。プラネタリウムでは満天の星を眺めて舟を漕ぐ瞬間も。

あとは「おきなわ郷土村」。初めに入った建物では小学生が三線を弾いている。学校の三線クラブに入っているとかで上手い。私達3人も三線の手ほどきを受けて難しいが感激。時間が足りなくなってあとは駆け足見学後、高速バスで一路那覇市に入る。宿は昨日と違って国際通りど真ん中のホテル。夕食は民謡居酒屋を見つけてチャンプルなど沖縄料理と島唄ライブを楽しむ。初めて恐る恐る「泡盛」のロックを飲む。美味しい、ウイスキーのロックと変わらないやん。食事と唄が終わっても私達6人しか客はいず、おかげで家族で沖縄民謡を披露してくれた人達からいろんな話が聞けた。孫娘さんはミス沖縄のとても綺麗なお嬢さんでした。ラッキー！



10月17日(金) 快晴 27°C 22°C

前日これも河合先生の提案で那覇市内の裏路地ガイドを頼む。モノレール美弥橋駅に行くのに地理的距離が解らずタクシーに乗ったが歩いてもすぐの距離でみんな苦笑い。ガイドさんと合流し、昔中国からの冊封使を迎え入れた橋、今は埋め立て地、亀甲墓や破風墓など案内してもらい、その後首里城へと向かう。昼食は地元の人に教えてもらって近くの隠れた住宅地にある店で5人は沖縄そばを、先生は沖縄家庭料理セットを注文して写真に収めた。今、先生は食に関心ありとみた。

あとは国際通りに戻り、通りを散策と夕食のお店探し。幸い近くにまたまた沖縄芸能を楽しめる居酒屋を見つけて、ぐるくんの唐揚げ、もずくのかき揚げ、海鮮サラダと久しぶりに魚料理を味わう。美味。Mさんと私は骨までしゃぶってた。

10月18日(土) 快晴 27°C 22°C

ホテルで初めてちゃんとした朝食後、沖縄県立博物館組と壺屋やちむん組と二手に別れて自由行動。私達2人はまず平和通り商店街から牧志第一公設市場へ。本土では見られない珍しい物が沢山。でも11年前に来た時より豚さんの顔も豚足(テビチ)も海蛇の干物も小粒になっているような気がする。

市場通りを抜けて壺屋やちむんへ行く通りに出る。ああ無情、11年前に訪れた通りは何処へ行ったのでしょうか。道路は整備され広くなり沖縄独特の赤瓦の漆喰の屋根の家はほとんどなくなり、コンクリートの建物が増えている。角の壺屋焼物博物館を見て、それでも通りを奥へといくと目指す新垣陶器店を見つける。でも以前に見せてもらった陶芸作業所は改築のため更地になっていて来年には新しくなると言う。女性店主とはいろいろ話はできた。台風なんか恐くないと言っていた喫茶「南窯」のオーナーにも会えなくて味気ないやちむん通りでした。

再度市場へ戻り2階の食堂での島唄パフォーマンス、飛び入りで唄うおじさん、踊るおばさ

んになんともいえない沖縄らしい大らかさを感じました。

時間も余り私達も博物館へ。しかし4日間のフル歩行にさすがに疲れたか早々にホテルに帰り、ロビーでみんなと合流。ホテルのロビーはご時勢のとおり中国、台湾、韓国、欧米人であふれ、まるで私達の方が外国人のようで小さくなっている感じ。モノレールも経験と那覇空港まで乗り帰路についた。夕飯はまた空港のコンビニ弁当だ。

- \*沖縄の人は皆さん親切で優しく善い人ばかり
- \*河合先生と同行して先生ならではのアイデアをだして下さり、名護のガイドさんや、那覇市内の裏路地を歩くガイドさんを頼むなどという発想は私達だけでは思いつかなかったであろう。
- \*それにしても河合先生の重く大きなバッグにはいったい何がはいていたのだろうか？

さて、各々のフィールドワークの課題は秘密ですが・・・成果はいかに？



那覇市裏路地の亀甲墓



三線を演奏する小学生

シニアクラブだより

# けやき遊歩クラブに初めて参加して

文学歴史学科1年 合田 一弘

入学以来このクラブに関心がありましたが、何かバタバタと日が過ぎてしまいました。そんなある日、クラスメートの森川氏が入会していると知り、次の予定を紹介してもらいました。彼がすべてを手配してくれた後、次の予定は六甲山へ登るので、具体的な行程が決まればメールが届くからと教えられ、後日、届きました。

以前、別のところで入っていたクラブでは、毎月歩くことが目的で 10km 以上は歩く会でした。六甲山も登りました。その印象があったので、遊歩クラブも同じ様に歩くことがメインかと思い、“この真夏に山歩きも大変だなあ”と正直少し気持ちが引きました。しかし、森川氏の手前、いまさら「今回はパスさせて」とも言えず、せめて高級な登山靴を買って少し緊張して出発しました。



高山植物園で美しいガイドさんの説明を聞く



「ニッコウキスゲ」が咲く高山植物園を歩く

テルのティータイムでは、素晴らしい眺望と楽しい会話、そして帰りはホテルのバスで一挙に最寄駅まで送られました。よくぞこれだけ見事な計画を立てられたものだと幹事の方々や下見の方に大感謝です。

最後にもう一点、イラストが良くできていて大変可愛かった。できればお名前も入れてください!?



少しは六甲らしいところも歩きました



アジサイを眺めながら



観光リフトに乗る

「来てみればさほどでもなし富士の山」という川柳がありますが、反対に「来てみれば楽しかり

けり六甲山」とでも言うべきか、私の大きな勘違いが、結果的により大きな感動に結びつきました。アジサイを眺めながらの高原ハイキング、見晴らしのよいレストランでの食事、リフトから見下ろした箱庭の様な庭園、高山植物園の珍しい草花と美しいガイドさん、そして六甲山ホ



この案内図を手にして一日楽しく六甲を歩きました

## 私の“チンドン”ものがたい

新しい企画シリーズの初回に登場するのは文学歴史学科1年の伊藤幸子さん。現在、素人のチンドン“笑顔の種まき「百笑座」”の一員として楽しくボランティア活動をされています。

### 園田シニアの人間探究1

#### —活動に取り組まれたきっかけは

小さい頃から近くの商店街を練り歩くチンドンが大好きで、4～5歳頃について歩いて迷子になり大騒ぎになったことも。結婚後、素人でチンドンをやっている人の記事を新聞で読み、やってみたいと思ったが、当時は仕事や子育て中だったので出来なかった。今から15年ぐらい前に、たまたま“チンドン募集”のポスターを主人が見つけて応募したところ、座長さんが前に新聞で紹介された人だったこともありすぐに一員にしてもらった。

#### —百笑座のメンバーや活動内容について

グループのメンバーは10名（男性は2名）、土曜、日曜を中心に老人ホームを廻ったり、関西地域の夏祭りや秋祭りなどに呼ばれていくこともある。老人ホームでは職員の方も飛び入りで扮装して参加してもらうことで入居者の方がとても喜んでくれる。

#### —今までの一番の思い出は

2011年、メンバーの娘さんがハワイに留学していて、その人の紹介でオアフ島にある日系老人ホームを訪れたこと。大歓迎を受けて、感激のあまり涙を流して喜んでもらった。皆が珍しがって写真を撮りまくり、ほんとに楽しかった。

#### —活動で苦労されている点は

特に苦労していることはない。ただメンバーの皆さんがそれぞれ仕事をしているので全員がなかなか集まりにくい。必要な衣装や小道具などもすべて自分たちの手作りでやっている。民謡、歌謡曲や、サンバなどをスピーカーで流し、

曲に合わせてチンドン太鼓を鳴らし、人と握手したり、触れあいたいのので楽器は使わない。

#### —家族や周りの人たちの反応は

もともと主人が後押しして薦めてくれた。子供たちも積極的に応援してくれている。最近は3人の孫たちも一緒に“チンドンごっこ”で盛り上がり遊んでいる。



熊野本宮大社にて（左から2人目が伊藤さん）

#### —毎年、富山市で「全日本チンドンコンクール」が開催されているが

今年、初めて素人部門のコンクールに参加した。優勝はしなかったが、プロのグループを含めて我々だけが唯一白塗りの化粧で出演したので皆さんにはとても珍しがられた。

#### —今後の夢や抱負について

今のメンバーでできるだけ長く活動を続けていきたい。また、機会があれば外国にも出かけて、日本のユニークなチンドンというものを海外の人にも知って欲しい。

#### <インタビューを終えて>

次から次へと面白い話が飛び出したが、「やりたいことは口に出して言い続ければ叶えられる」「失敗も笑いに替える」という言葉に彼女の前向きで積極的な姿勢が覗えた。大好きなおしゃべりとチンドンでこれからも笑いの伝道師として活躍されることを期待しています。

（インタビュー 「けやき便り」編集クラブ 金森、樽井）

## 伝統文化の“香道”を楽しむ

今回、登場するのは文学歴史学科1年の山田弘子さん。近年の香りブームの中で日本の高らかな伝統文化として見直されている香道（こうどう）に楽しく取り組まれています。

### 園田シニアの人間探究2

#### —香道について

香道とは、一定の作法に基づいて、香木（こうぼく）を焚き、その香りを聞き（香道では香木の香りを嗅ぎ分けることを「聞く」という）、香りを味わい、香りを当てて楽しむ日本の伝統的な芸道である。その歴史は古く室町時代の東山文化のもと茶道や華道とともに確立された。

香木とはインドや東南アジアで産出する芳香を放す古木のことで、代表的な香木として伽羅（きゃら）が有名である。

#### —香道に取り組まれたきっかけは

もともと結婚する前から日本伝統工芸の会員の先生から「辻が花絞り」という着物の染めと絞りを一緒にした技法を習っていた。創作した着物はお茶会や仕舞には合わないのので着る機会がなく、香道を習えば自分が染めた着物を着てお稽古ができるので楽しいと思った。

香道には御家流（貴族や公家の流派）と志野流（武士の流派）に分かれている。なかなか空気がなくて御家流の会に入会するのに4年ぐらい待った。

#### —香道のお稽古について

基本的には月に3回あるが、熱心な人は朝と昼もお稽古をする。香元（こうもと）になる人が何種類かの香木を切り交ぜて5包を用意し、ひとつずつ香炉で焚いて、参加者に香炉が順番にまわされ、3息で聞き分ける。聞き分けた香りの答えを提出して、最後に香りの銘が披露される。この香りを当てる競技の総称を「組香」（くみこう）と呼ぶ。

#### —香道の楽しいところは

2回目のお稽古の時にまぐれで香りを当てることができとても面白いと思った。その後はなかなか当たらず香道の奥深さを思い知らされている。当初は精神的な癒しを求めて入ったが、単に香りを聞くだけでなく、いろいろな香りを使って一つのテーマが表現され、香りにまつわる書や詩、和歌、古典の文学作品などと深く繋がっている。それらの知識が必須だと思って園田シニアの文歴に入学したが、いろんな詩歌や古典文学などを学ぶのがとても楽しい。

#### —ご家族たちの反応は

母親も能や長唄、浄瑠璃、歌舞伎などが好きだった。亡くなった主人も趣味でジャズのピアノを弾くなど芸術に関心が高く、私がいろんな伝統的な芸を習うことや観賞することに口をはさまなかった。子供たちも仕舞や能をやっていた。



写真は有名な香木であるらんじゃたい蘭奢待。正倉院の御物で、これから香を切り取ったのは、足利義政と織田信長とそして明治天皇が著名である。

#### <インタビューを終えて>

香道の世界にはあまり馴染みがなかったが風流と雅に彩られ、文学的レベルの高い総合芸術であるという話は良く理解できた。まだまだ学ばなければいけないことが一杯あるとのことだが、いかに楽しく生きていくか、現在を精一杯生きることに賭けていると言う彼女のこだわりとたくましさに乾杯！！

（インタビュー 「けやき便り」編集クラブ 金森、樽井）

## 木工に魅せられて20年

国際文化学科2年 楊 錦華

若い頃、学校でやるスポーツ、特に球技はあの苦手であった。ラグビーにせよ、野球にしても球をうまくキャッチできない。運動神経がにぶいので、唯一、人並みについていけたのは山歩きであった。先輩に連れられ六甲を歩き、北アルプスを歩いている内に山にのめりこんだ。高じて仲間30人ほど集って山小屋を建てたことがある。それは八方尾根近くの白馬山麓にあって、そこをベースに冬はスキーに興じたものだった。いつしか50歳でリタイアし、自分の小屋を持つのが夢になった。早期引退は叶わなかったが、山小屋の夢は実現した。

カナダはウィスラーの著名なログビルダー、Dürfeld Log Construction 社にカットを依頼し、100平米ほどの丸太小屋を発注した。丸太材は香りが良く、ねじれや暴れの少ない樹種を探し、末口12インチ(30センチ)のウェスタンレッドシーダーに決めた。レッドシーダーで組んだ小屋のサドルノッチは20数年経った今でも隙間一つできてない。



整理箱 レッドシーダー

小屋が出来て真っ先にテーブルと椅子を作った。ロフトに収納棚や台所に吊棚を作り、天井にファンを取り付け、丸太に木材保護剤を塗り、溝を掘って排水用のU字溝を埋める。それ以来、小屋の整備に夢中になり、特に木工にうち

小屋が出来て真っ先にテーブルと椅子を作った。ロフトに収納棚や台所に吊棚を作り、天井にファンを取り付け、丸太に木材保護剤を塗り、溝を掘って排水用のU字溝を埋める。それ以来、小屋の整備に夢中になり、特に木工にうち

ランド板ログ・キットを購入した。20平米ほどであるが床張りから屋根葺きまでやって楽しみ、カントリーワークショップと名づけ、木工の作業場とした。

当初、使っていたのは替刃ノコギリ、ノミ、カンナなどの手工具であったが、すぐに技術が伴わないことを悟り、電動工具に頼るようになった。今では電動マルノコ、バンドソー、プレーナー、手押しカンナ、ルーターなどを多用している。



椅子A オーク

自己紹介などの場で、「趣味は木工です」とやると、「ああ、大工ね」とかえってくることも多い。

ニュアンスがちよっと違うので大抵は慌てて否定してみるが。「木」の字と「大」の字は良く似ており、加えてどちらも木材を扱うのでその違いを説明するのに一苦労する。ものの本によればその昔、大工は木工とも言い、一字で書けば奎となる。また木匠・木工とも言った。

木工のジャンルは広く、玩具から家具作りまで、カントリー調からアンティーク調といろいろあって、使用する材料とも密接に関係する。私が作るものはアートにはほど遠く、あくまでクラフトの域だと思っている。そして、私の木工のジャンルはウッドワーキングと言えばずっと分かりやすい。

工作する時、私が最も大事にすることは基準線を引くことと測らないで「光る」ことである。基準とする線をしっかり引けば全てが正確に出来る。基準線ほど頼りになるものはない。一方

「光る」は広辞苑にも載っていないが、寸法・形など測らないで、それを直接他の材に移しとることをいう。誤差を小さくする智恵である。例えば、ある長さの棒をもう一本つくる場合、モノサシで何センチ何ミリと測れば、数字を読みとるときとそれをワークに移すときに夫々誤差が発生する。そして墨付けした目印にノコギリを当てるときに三つ目の誤差が出る。



面積パズル 杉

昨年12月、国際コース忘年会の余興で披露した「三角形の面積の行方？ パズル」をご記憶の方もおられるだろうが、あれは正しく誤差を意識的に利用したものである。

何かを作るとき、サイズやデザイン的设计とか、構想を練る時間が大好きだ。制作も楽しいが、構造を考えるのが一番楽しい。構造がシンプルで連射できるゴム銃は今でも自慢作品の一つだ。



連発ゴム銃 桜・釘・輪ゴム

孫ができると、がぜん作るものが多くなる。乳幼児期の折りたたみできる「トレー付き食事椅子」、そして車輪の付いた「おもちゃ収納箱」、まだ年少組なのに早すぎる「学習机とキャビネット」などなど。爺バカの見本だった。



トレー付き・幼児椅子 レッドシーダ  
最近の作品は香油の小瓶 48本納める印籠型小箱。



香油箱 杉・シナ合板



文机 オーク・櫻

近頃では「置くところがないから家には持ち帰らないで」と言われる。困ったものだ。

## ネパールの旅 ～世界の屋根、ヒマラヤへのトレッキング～

国際文化学科3年 道端 まちこ



マチャプチャレ(6993m)、アンナプルナⅢ(7555m)、アンナプルナⅣ(7525m)、アンナプルナⅡ(7937m)、ラムジュン・ヒマール(6986m)

ホクシン(1500m)の村より撮影 H26. 1. 28

ヒマラヤのトレッキングシーズンは雨期をはずして乾期(9月後半～翌年4月後半)が最適だ。

1月24日～2月1日まで9日間(移動に3日間)の旅。ネパールの首都カトマンドゥに2日間、ネパールの第2の都市ポカラに5日間滞在した。実際トレッキングは、ポカラ3日間、カトマンドゥ1日で他の時間は、タクシーとウォークで観光歩きました。

唯一の国際空港カトマンドゥに到着後(PM11)、早朝にポカラ行きの軽飛行機に乗る予定だった。が、この飛行機は定刻に離陸することはずないらしい。なぜならカトマンドゥは標高1330mに位置する。その周囲には6000～8000m級のヒマラヤの屋根があるせいか朝は濃霧が強く視界が悪い。それに加えて大気汚染でより視界が制限されている。

一時間以上遅れで出発したカトマンドゥ～ポカラの飛行はヒマラヤを上空から遊覧する絶好のチャンス！ そのため進行方向に向かい右側に席をとると良い。しかし、残念ながら横3列の真ん中だった。それでも30分の飛行中まどから見るヒマラヤに歓喜、日本にも沢山の山が

あるけれど、6000～8000m級の尾根が続く世界一の山脈に遭遇していると思うと一瞬一瞬が尊い気がした。

ポカラの町は標高800mの緑豊かな盆地にある。フェワ湖とアンナプルナ連峰の展望で知られる。カトマンドゥよりは暖かく亜熱帯の雰囲気。町の中ではどこでも居並ぶアンナプルナ連峰が見える。なかでもポカラの象徴ともいえるマチャプチャレ(6993m)。その名は「魚の尾」の意味で頂上がふたまたに分かれていることからそう呼ばれている。

標高は他の山々より低い、手前にあるためひととき高く見える。

ポカラの町に到着と同時に、耀くように聳え立つ白い衣装をまとったマチャプチャレの山並みが眼に入り、眩いばかりだ。息を呑む光景に圧倒された。町の中を歩く人たちはゆったりしている。レイクサイドを中心に観光地となり、観光客が多い。ヨーロッパ人、中国人が多いらしい。

1月26日ミニトレッキング。サランコット(1592m)の丘での日の出を見るために4時起きで登った。太古の昔より悠然と聳え立つ白銀の

山並みに、太陽が一日の聖なる光をともし始めた。マチャプチャレのマチャ(魚の部分)がうす白く、そして赤みが差し込んで段々と白銀の姿に変化していった。

1月27日、日本妙法寺(1113m)からはフェワ湖とヒマラヤを堪能できた。帰りは道に迷い、一時はここで遭難? と心の中で思った。が、フェワ湖の岸壁にでた。運が良かったのか一艘のボートが見えて、それに乗船することができて難を逃れた。あとからみんなで考えた、何故あの時点であの場所にボートがいたのか? たぶん迷いやすい所なので一日に何人かの観光客を目当てにボートを停留させているのではという結論になった。

1月28日、ホクシンはサランコットに劣らない絶景の村だった。ヒマラヤの展望はさらに広がり、眼下にポカラの町を望むすばらしい景色だ。村の眺望のよいところでは、両手を広げて

も余るくらいの180度のヒマラヤの山並みが神々しく耀いていた。道中は水牛をムチで操りながら、田を耕している風景、その後にはヒマラヤの白く輝く連峰が連なり、登り道では15kg~20kgはあろう荷物を背中から頭にかけて降りてきたり、登ったりしている現地の女の友達、また農家の庭先には、やぎ、水牛、鶏、犬が寝そべっていたり、なんとゆったリズムなのか! 今の日本では決して見られない景色だ! そして観光客に愛想が良い現地語で「ナマステ」(日本語でこんにちは)と、声掛けすると機嫌よく返してくれる。行きかう人々みな表情が明るい。決して豊かではなさそうであるが心に曇りが見られない笑顔をみせてくれる。

そして気軽に英語で話しかけてくる。海外に行く度に思うことであるが、何故よその国の人こんな言葉が自由に操れるのかと、何故自分はそれができないかと落ち込む。



道中で出会った子供たち



荷物を運ぶ女の人



家の外で炊飯中



ホテルから歩いて30分、ホクシンに向かう道の光景・後方はアンナプルナ連峰

1月29日、ポカラからカトマンドゥへは長距離バスで7時間かけて移動。ヒマラヤ前山マハーラタ山脈(1500m~3000m)の山肌をぐねぐねと際限なく進む。ここは日本でいえば国道1号線か2号線の幹線道路、幹線道路とは名ばかり道はデコボコ、グネグネ折れ曲がり狭い道幅を大型車が絶え間なく行きかう。崖下には転落した車が見えている。乗っている方も緊張しっぱなしである。

この道路事情に、発展途上国の弊害の一つの要因を見る気がした。

カトマンドゥはネパールの首都、空の玄関国際空港があり、かつては栄光の町といわれていた。ネワール文化が花開き、数々の寺院や記念碑がたてられた。「人よりも神々の方が多く住む町」といわれていた。1990年以降の民主化以降は急速な変化を遂げている。農村部から人々が移動し神々より人間の方が多くなった。現在人口500万人、急激な人口増により、交通渋滞、慢性的な電力不足による毎日の計画停電、大気汚染等近代化に向けていろいろの問題を抱えているのが現状である。

ここで感じたことは、何処かの国以上に大気汚染の国なのでは？ この町を歩くにはマスクが欠かせない。しかも防塵マスクの必要性を感じた。そして慢性的な停電、一日の中でも日中はもちろん、朝方暗い内も停電になり、おかげで第一日目早朝起きに電気がつかず、荷物につまずいて転倒し痛い目にあった。旅行者はライトが必需品である。

1月30日、カトマンドゥから車で一時間位のところに位置するナガルコット(2100m)は、エベレスト方面の日の出ツアーが多い。我々はここからチャングナラヤンの村まで4時間強の道のりをゆっくりと歩いた。30分~40分位歩くと遥か前方に(実際は100キロ先)あれがエベレスト(8848m)? と確認が必要なほど遠くにエベレストの山並みが見えてきた。余りに遠くなので感動は沸いてこなかったが今回の目的は達成した。世界一の山、遠くではあるけれど、この眼で確認したことに意義がある。

今回地球の歩き方の本を中心に歩いて、この本に書かれている事を確認しつつ進んだ旅、現地の人との交渉、時間の使い方、食事をするために暗い中、ライトを照らしながら探し当てたローカルな食事(ダルバート、タルカリ)は、シンプルでおいしかった。そして安い。安いことがいい事なのかと考えれば色々な問題がある。あくまで旅行者としての視点である。今回の旅はいままでにない新鮮な気持ちでいられた。なぜなら五感としっかり足を使った日常がそこにあったからである(今までは添乗員についてたから・・・)。歩いた歩いた毎日20キロ位。仲間が遅れまじとついて歩いた。旅を終えて同行者全員元気に帰国できたことに感謝。

海外の旅は不安と緊張が続く。年齢的に健康のバランスを考えつつ次を考えて行きたい。

---

—これからの旅のプランとして地球の歩き方の本に記載されていた文章を紹介します。

海外旅行というと、短期間でいかに効率よく沢山の都市を回るか、ということで頭がいっぱいになってしまう人が多いが、これは旅ではなくて、ただの「移動」である。何日間で何キロ移動し、いくつかのポイントを経過したか、これでは地球の走り方になってしまう。ビスターリ(ゆっくり)調で暮らしている人々の間を架け橋で通り過ぎる、そんな旅はこのさいやめにしよう。だいたいネパールでは、きっちりとした日程を組んでおいても、実際はそのとおりに運ばないことが多い。それはいろいろな事情があるが「こんな小さな町に思わず長居してしまった」などという場合は必ずそこにすばらしい出会いがあるはずだ。—

## 大菩薩峠・大菩薩嶺と紅葉の昇仙峡

文学歴史学科3年 橋本 秀明

標題は、度々利用するツアー会社のツアー一名である。10月28日から一泊二日の旅。参加者は総勢13名。殆どツアーで知りあった顔。他に馴染みのリーダーと添乗員。以下に行程を示す(移動はチャーターバス)。

・10月28日

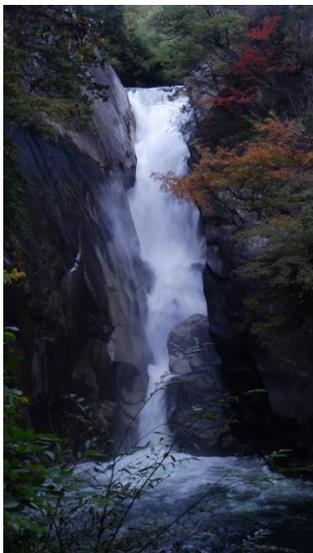
梅田・京都竹田⇒昇仙峡[長潭橋・・・天鼓林・・・石門・・・仙娥滝] ⇒甲府市内(ホテル泊)

・10月29日

甲府市内⇒大菩薩[上日川峠・・・唐松尾根・・・雷岩・・・大菩薩嶺(往復)・・・大菩薩峠・・・上日川峠]⇒勝沼ぶどうの丘・天空の湯⇒京都竹田・梅田解散

昇仙峡は、関東勤務のとき一度行ったことがあるが全く記憶無し。観光地100選渓谷の部で第一位とのこと。長潭橋から上流の仙娥滝まで4.2km。歩いている人は全くいない。観光客の大半は、上流の滝周辺を散策していた。

紅葉には少し早かったようで景色が中途半端。しかし、巨石が至るところにありそれぞれ名前が付けられていた。なかでも覚円が数畳敷広さの頂上で修業したと言い伝えのある主峰「覚円峰」は圧巻であった。高さ30mの仙娥滝も多くの観光客がカメラ・携帯を向けていた。



仙娥滝

山梨県東部、秩父山地の南に位置する大菩薩は関東在住の方々にとっては馴染みのある山・峠である。関西に於いて年配の方々には、中里介山の著書『大菩薩峠』で知っているだけで大方のひとには知られていないのではないかと。昨夜も梅田に着きリーダー他2人と共に打上げ。居酒屋で飲んでいると、隣の席から声掛けあり。隣の20代・50代の男性は著書も山・峠も知らないと言っていた。

大菩薩は2回歩いているが、記憶に残っていない。ただ、山がなだらかであったことだけは憶えている(案の定であった)。

昔、フリーマーケットで『大菩薩峠』の中古文庫本(10数冊)を購入。最初の巻で読むのを諦めたことがある。映画「大菩薩峠」で机龍之介を演じたのは、大河内伝次郎・片岡千恵蔵・市川雷蔵・仲代達矢の4人である。

当日は、最高の天候で、雷岩からの眺望は他に望めない最高の景色だった。富士山・南アルプスが一望。紅葉も進んでいて富士山を背景にした山の色が素晴らしい。大菩薩峠までその景色を延々と見る事ができた。



雷岩からの眺望

平日にもかかわらず、多くのひとが山歩きを楽しんでいたように思う。また、年齢を問わず女性の単独行も目立った。関東では日帰りが出る山・峠として人気を博している。

なお、日本百名山の一つ大菩薩嶺の標高は2057m、大菩薩峠1897mである。皆さん、山を歩こう。

2014年10月30日 記

## 東南アジア4ヶ国を旅する①

研究生 十河 和夫

2014年7月21日～8月22日にかけて、東南アジア4ヶ国タイ、カンボジア、ベトナム、ラオスを周遊してきました。2012年吉本先生のシニア専修コース「アジア太平洋文化論」で東南アジアを学び、自分の目で見てみたいと思い旅してきました。

### 1. 東南アジアとは

「東南アジア」という概念は、1943年連合軍が東南アジア司令部(The Southeast Asian Command)を設置。日本では戦時中「南洋」「南方」などの用語が用いられていましたが、その後South east Asiaの訳である「東南アジア」が普及しました。東南アジアは「大陸部」と「島嶼部」に大きく分類されます。

「大陸部」の国は、ミャンマー、ベトナム、タイ、ラオス、カンボジアです。今回、私はミャンマーを除く4カ国を旅しました。

この「大陸部」の国と中国の雲南省と広西チワン族自治区の二つの省が加わって「メコン圏」という経済圏を構成しています。メコン圏は、1988年に、タイのチャーチャイ首相が「インドシナを戦場から市場」と提案した中から生まれました。5つの国と中国の省は総てメコン川に関わっているため、メコン圏という名称がなされました。これらの国や省は国家の枠組みにとらわれない局地経済圏を目指しています。そのために国と国を結ぶ三つの回廊作りが決められました。雲南省昆明からタイのバンコクに結ぶ南北回廊。ミャンマーのモーラマインからベトナムのダナンに至る東西回

廊。タイのバンコクからカンボジアのプノンペンを経てベトナムのヴンタウに至る南回廊です。

2014年8月4日に、昆明市とバンコクを結ぶ高速鉄道の施設をタイの軍事政権が許可したという報道がありました。これは、この南北回廊の整備の一環で前々から計画されていたのですが、タイが軍事政権になった途端にこの計画が発表されたことに私は危惧を感じています。

カンボジア内戦の時、中国はポルポト派政権を支持していて、軍事物資をタイ軍隊経由でカンボジアに送り込んでいました。タイ軍隊はその見返りにカンボジアの木材や翡翠などの宝石を取り扱う権利を得ていました。つまり、ポルポト派、中国、タイ軍部は利権を仲介に深い関係を作り上げてしまっていたのです。

さて、旅の計画作りですが、私のバイブルともいう「定年バックパッカー読本」に定年バックパッカーの心得として「一人で旅に出る」「旅は1カ月サイクルとする」「現地の日常食を食する」「ちょっとした贅沢と質素を使い分ける」と書いています。

この教えを基本に次のようなルートを計画しました。タイのバンコクが起点です。タイからカンボジアへの国境越えはタイ国鉄「東線」でアランヤプラテートからポイペトへのルートが定番です。アンコールワットに行くためにはこのルートが最短なので常にバックパッカーがよく利用していますが、イミグレでは常に混雑しています。しかし、カンボジアの国境の町ポイペトが非常に問題のある町です。「地球の歩き方」などを見ると、イミグレーションでワイロを要求される。国境を越えるとカジノのホテル



が乱立。盗難がよく発生。タクシーに乗ればぼったくられる。道を外れたら地雷が埋っている。今でもポルポト派の拠点である。と、良くない情報ばかりです。



中年バックパッカーは慎重です。海沿いの副回廊が整備されたという情報を得て、海沿いのコースを躊躇なく選びました。トラートからカンボジアのコッコンに入国。コッコンからはバスでシアヌークビルへ行き。シアヌークビルからプノンペンに行きます。プノンペンから国際バスでホーチミン。ホーチミンからは国道1号線を北上してニャチャン、ホイアン、ダナン、フエまで行きます。フエからは国際バスでラオスのサワンナケットまで。サワンナケットからはバスで国境の町ムクダーハン、ウボンラーチャターマーへ行き。ウボンからバンコクに帰るといふ周遊を考えました。さて、今回の旅行がこの計画通りに上手く旅行できたか報告させていただきます。

## 2. タイ

タイは2014年4月から軍事クーデターにより軍事政権になっています。前田先生の「国際事情」で、タイはクーデターの多い国だという事を習いました。

「2006年以後、内政的に対立の激化傾向。現在までにデモ隊と治安当局との衝突で死者数90名、現在は一時的に安定。国王の政治的影響力が大きい」微笑みの国と言われているが死者もでるほどのクーデターがあったとは驚きですが、今回のクーデターは衝突もなく軍事政権に移行されました。

タイは戒厳令が引かれたままですが市民生活は平常通りでした。到着した日が、僧を敬(うやまう)「三宝節」の日でした。三宝節の初めの2日間はアルコールの販売が法律で禁止されています。コンビニもレストランもバーでも酒は売ってくれません。歓楽街のバツポン通りも閑散としていました。バーのテラスではファランの男の人が無然とした表情でコーラを飲んでいました。ビール好きのぼくも我慢したのですが、そうか戒厳令の夜とは、こんな雰囲気かも知れないと勝手に想像し、五木寛之の『戒厳令の夜』の雰囲気を少し味わった気分になりました。

タイではまず、旅行安全の願いを込めてラク・ムアン(市の柱)に参拝してきました。河合先生の「国際演習」の授業で「タイの民衆宗教」を学んだ時にラク・ムアンを知りました。タイではバラモン教の教えに従って、新しい町造りをする場合、まず基準点となる柱を建て、その町の永遠の発展を祈る習慣があります。ラク・ムアンは土地の霊が宿る柱であり、生命の柱でもあります。形状を見て解る通り、インドのリング信仰と同じだと思えます。日本でも柱の信仰があります。古事記では神を柱で呼称しています。さらにイザナミとイザナギの結婚も柱の回りを廻って見合っています。諏訪大社の「御柱祭(おんばしらまつり)」は有名ですね。ラク・ムアンはタイの各地にあります。各都市で祀られ方に特徴があつておもしろいです。



トラートのラク・ムアン

当レポートは内容が多岐に渡りページ数が多いため、何回かに分割してシリーズで掲載することにいたします。次回はカンボジアとベトナムについて報告する予定です。

「けやき便り」編集クラブ

## 過ぎた時間を味方にして 一旧かなを学ぶ—

文学歴史学科2年 相田 晴夫

結婚して間もない頃、母から手紙が届いた。親と離れて暮らすのは初めてのことで、母の手紙は初めてだった。旧かなづかひで書いてあった。

「さうか、母の世代は旧かなを習ったのだ」。私は母と子でかなづかひが違ふことに改めて気づいた。「さうだ、いつの日か母のかなづかひを身につけよう」と思った。

かなは平安時代初期に成立したとされるから、かなづかひには1200年の歴史がある。新かなの方は、旧かなに代へて、昭和21年11月に内閣訓令で公布された。私はこの後に生まれた。新かなの使用はたかだか68年ほどで、かなづかひの歴史の中では5%の期間にすぎない。

今年の夏休み、母の手紙を思ひ出して旧かなの学習に取り組んだ。旧かなは、元々、かなと発音が一致していたが、時代と共に発音に変化して、かなと発音とにずれが生じた。新かなは、このずれをなくすものとして公布されたが、私は伝統ある旧かなの方が合理性に優ると考へてきた。

学習は、旧かなづかひの原則をまづ押さへ、例外的なかなづかひをする言葉を個別に覚える。語の構成要素や成り立ち、語源や音便現象などを考へながら学んでゆくと、意外にむづかしくはなかった。「なぜ、むづかしくなかつたのだらうか」。それは、これまで日本語を使つて過ごしてきた長い時間が、学習の味方をしてくれたからだと思つた。2~3週間もするとほぼ自信が持てるやうになった。夏のをはりの夕べ、近くの雑木林から蝸のこゑが聞こえてきた。

紫式部も兼好も漱石も日本人なら誰もが、旧かなを用ゐてきた。古典文学は旧かなと共にあった。秋の学期が始まり源氏物語を受講したをり、私は本文を旧かなに注意しながら読むやうに変はつてみた。思ひもしないことだった。母と子を隔てたかなづかひの溝、たうとう、この溝を埋めえたのだと今晴れやかに思つてゐる。

## JRの色

研究生 水原 剛

JR塚口駅のホームで電車を待っていた時に気付きました。電車の前後と、車体の中央上部に電光表示された「普通」「快速」などの文字の下線の色が黄、青、桃の3色ありました。本来は1色でしょうが宝塚線の塚口駅には京都・神戸線、東西線も乗り入れていてその路線ごとに色別されています。ラインカラーと呼ばれ色分けは誤乗防止の為とか。またホームの駅名表示板も色分けされていて、尼崎駅には3色ありました。

電車だけでなくJR各社も色分けされ、駅玄関の看板のロゴも西日本は青、東海はオレンジ、東日本は緑などと。当然新幹線も色分けされていますね。東海道・山陽新幹線は青、九州新幹線は赤、東北新幹線は緑とか。

JRだけでなく大阪の地下鉄も路線ごとに色分けされていました。例えば御堂筋線は赤、中央線は緑などと。

皆様も電車に乗って旅に出られたら、駅の色、ホームの色、電車の色の違いを楽しまれてはいかがですか？ また別の楽しみも生まれてくるかも。

大阪駅や京都駅にはたくさん色がありますね。それでは皆様にご質問を。大阪駅にホームの駅名表示板は3色ありましたが、幾つ色の電車が走っていますか？ 一度ベンチに座ってゆっくりと眺めてください。環状内回りホームにはたくさん入ってきますよ。



このラインは桃色



このラインは黄色

新設！ 読者の広場 ①

吟行

田辺真人先生と行く 歴史探訪ツアー

研究生 赤澤 佳寿子

観光地は 岡城址（もうひとつの竹田の天空の城）と長湯温泉 善光寺 磨崖仏（日本最大級）

旅の始まりは11月6日六甲アイランドを19時にフェリーさんふらわあに乗り込み出発～～船中泊です。西大分港7日の6時20分着、大型バスに乗り変え原尻の滝へ。9万年前に阿蘇の噴火で生まれ火砕流により、滝を形づくっている岩は大きな一枚岩で「阿蘇溶結凝灰岩」と呼ばれる岩石でできているそうです。緒方平野の真ん中にある突如現れる幅120m高さ20m滝の上の川には鳥居があり水路は豊かに滝に分散されて流れていました。春には周りの田畑一面に菜の花、チューリップが見事に咲き揃うそうです。

小春日や杖それぞれに岡城址 佳寿子



岡城址で田辺先生のお話を聞く

村里へ豊かに流れ冬の滝 佳寿子



原尻の滝

トンネルを幾つも抜けて国指定史跡・岡城へ。これは、これは、面白い、登城券が巻物に・・・びっくりしました。

兵庫県の竹田城も天空の城と言われていますが、竹田（たけた）の岡城は豊後国大分県が誇る、いえいえ田辺先生も絶賛するほど本丸跡から九重連山を眺める景色も規模も素晴らしい城跡でした。二の丸跡には不朽の名曲（荒城の月）を作曲した滝廉太郎の像が立っていました。

今回朝来から参加された竹田城のボランティアの方達と一緒に。そして城下町で入った和菓子屋の茶房（但馬屋）は豊岡で休業されて大分の竹田に戻り店を構えたと聞きました。‘袖振り合うも多生の縁’とは言うもののいろんなご縁があるものですね。

旅の仕上げは九重火山群東麓にある長湯温泉に入り癒されて西大分港から船中泊で六甲アイランドに戻り歴史探訪、校外学習の‘遊ぼう～学ぼう～の旅’で御座いました。

冬風や五体を受けて播磨灘 佳寿子

お土産は両手一杯カボスの実 善 恵

磨崖仏隠れクルスに木の葉散る 智 子

岡城址栄華の夢や草紅葉 八枝子

読者の広場 ②

川柳

文学歴史学科1年 伊藤 幸子

あなたにとむかし手作りいまは餌  
 (飼いならした?)  
 いつまでも私は名無しオイオマエ  
 (私でなく一般的に)  
 へらずぐち保険効かずに縫えぬまま  
 (手術したのはに口まで縫えとは)  
 孫の指テレビ画面でスマホかな  
 (2歳の孫、私がするマネをして)  
 すしネタを水族館でしないでね  
 (私はマグロ、俺はタコ、聞いた魚がびびってる)  
 ジジババの財布が痩せて孫太る  
 (お父さん! 焼肉の食べ放題がよかったね)  
 山登り忘れたところに疲労感  
 (屋久島は厳しかったのかそれとも)

スケッチ

研究生 浜谷 智恵子

上より  
 けやきロード・農業公園・ウインターコスモス



文学歴史学科9期生 26年行事

- 1月 天満天神繁盛亭      2月 石山寺
- 6月 あべのハルカス～浜寺公園 (チン電)



浜寺公園駅

- 9月 吉村先生セミナー&食事会
- 12月 田辺先生講演会&忘年会

園田シニア入学から5年目になりましたが、皆様のご協力で延べ80名の参加をいただき、特に9月は21名、12月も19名の参加で盛り上がりました。      研究生 木下 俊造



## 新企画シリーズへの応募&投稿依頼

### ◎「園田シニア人間探究」への応募について

今号から園田シニアの学生の中で興味深い人生経験をされた方、面白い趣味などに取り組まれている方にインタビューして紹介する新しい企画シリーズを届けていくことになりました。

この企画のインタビューに応じていただける方を募集しています。自薦他薦を問わず、多くの方のご紹介をお願いいたします。

連絡先：国際文化学科2年 樽井 敏彦  
携帯：090-2833-8676

### ◎「読者の広場」への投稿について

今号から「読者の広場」を新設し、皆様方のいろんな作品などを掲載させていただくようになりました。

俳句・短歌・川柳・絵・書・イラスト・クラブ新設呼びかけ等、皆様方の投稿をお願い申し上げます。

投稿は2号館1階の総合生涯学習センターに設置の「けやき便り」投稿箱あるいは下記のメールアドレスに作品などを添付して送付ください。

[ttarui@mx5.canvas.ne.jp](mailto:ttarui@mx5.canvas.ne.jp)

## 編集後記

今号は、園田学園女子大学の生涯学習開設 35周年ということで記念行事や関係の深い方からの寄稿文等を掲載しています。公開講座の開講やシニア専修コース開設のため苦勞をされて、地域の学びや交流の場を提供していただいた生涯学習センターの関係者の方々に感謝するばかりです。一方で我々シニア学生もその場を有効に活用し、楽しく学び、遊んで有意義なシニアライフを過ごしていかなければと改めて思っています。

また、今号から園田シニア人間探究と読者の広場という新たな企画シリーズを設けましたので、今後とも長く続くよう読者の皆様のご協力とご支援よろしくをお願いいたします。(T. T)

「けやき便り」各号のカラー版が園田学園女子大学のホームページからご覧いただけます。

### <検索方法>

#### 園田学園女子大学

尼崎市。大学・短期大学部案内、入試情報、学部・学科案内、公開講座情報、キャンパス。

[www.sonoda-u.ac.jp/](http://www.sonoda-u.ac.jp/) - キャッシュ

[交通アクセス](#)

[総合生涯学習センター](#)

[学部・学科紹介](#)

[受験生の方へ](#)

[オープンキャンパス](#)

[お問い合わせ先一覧](#)



総合学習センターの画面上段の学びの場の中から「シニア専修」をクリックする




クラブ活動紹介

[詳しくはこちらより](#)



「けやき便り」編集クラブの紹介の後に「けやき便り」のバックナンバーが表示される

### けやき便りバックナンバー

[けやき便り第10号発行日平成26年6月9日](#)

[けやき便り第9号発行日平成25年11月20日](#)

...